

個人報告書

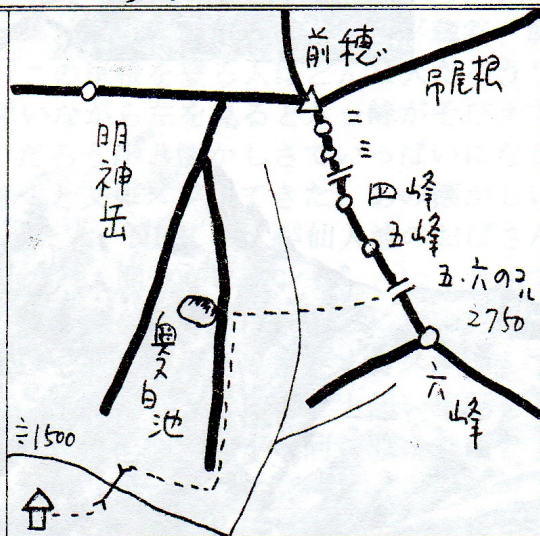
| | | | |
|--------------|--|---------------|-------------|
| 通算山行NO | 通算NO・1006 (後藤) | 報告者 | 加藤 秀子 |
| 年月日 | '01年10月 5日 (金曜日) ~ | 年10月 7日 (日曜日) | |
| 山行名 | アルプスの岩稜 | 天候 | 5/ 晴れ 6/ 晴れ |
| 山名 | 前穂高・北尾根 | | |
| この山のセールスポイント | 岩峰と紅葉の美しさ！ さすがアルプス | | |
| コース及びタイム | /5 富士IC 17:30⇒沢渡「さとう」21:00 /6 起床 3:00/4:40⇒上高地 5:10/25~新村橋~奥又白谷池11:10 ~ 5.6の科尔13:00 | | |
| 標高差 | △ 1500 m 2750 m = 1250 m | 体力度 | 1・2・3・4・5・⑥ |
| | ▼ m m = m | 技術度 | 1・2・3・4・⑤・6 |
| 全行程距離 | ~ = km | 景観美 | 1・2・3・4・5・⑥ |
| CL | 後藤隆徳 北尾根の ロープに遊ぶ 赤トンボ | | |
| | 加藤秀子 奥又白池は何とすばらしいところ。 | | |

ブーブーいう車の音で目が覚めると、すでに駐車場のゲート前には車の行列ができていた。未だ3時、もう3時である。簡単な朝食を済ませ、慌ただしく駐車場から「さとう」へ移動。予約してあったタクシーに、居合わせた2人組を便乗させタクシー代を節約。@2, 500也。

未明の上高地バスターミナルは既に登山者でごったがえし、此れからの混雑が予想された。一年のうちで最も混む時期ですよ、とタクシーの運転手さんが話していたが、穂高？酒沢？の紅葉はさすが凄いい人気である。道がこまないうちにと、急かされるような気持ちで出発。

梓川の清流沿いに歩く林道は、冷気をはらみ、ひんやりとしていた。心地良い清浄な空気に足取りも軽く、『この分なら、荷物が軽ければ今日中に岳沢まで下れるかもね』と本気で考えたりもしたが、今回は手堅く行く事にした。徳沢から新村橋を渡り梓川右岸の林道に入る頃になると、陽射しも強くなり暑さで汗が吹き出すようになる。徳沢で水を調達したザックの重量はCL 20kg、加藤 19kg。ズシリと重たい。額からポタポタ落ちる汗が目に入り、目に痛み。コンタクトなので、目をこするわけにもいかずひたすら我慢するが、今度は目の縁が痒くなってどうしようもない。困ったものだ。

梓川右岸の林道を500m程行った所でパノラマコースと奥又白谷の分岐となる。分岐は沢をはさみ、右岸にある大きな石に赤いペンキで矢印の表示がしてあったが、チョットわかりづらい。顔を上げると、前穂の北尾根の険しい尾根がグンと迫る。5・6の科尔は遙か上にあつた。正面少し左手、荒々しい沢が松高ルンゼ、その落ちる手前からルンゼ右手の瘦せ



た尾根に伸びるのが中畠新道。これに取りつく。人一人がやっとの狭い灌木の尾根は、富士山の胸突き八丁を更に上回る程の急登で、木の根や、岩の引っ掛かりを掴みながら、やっと一足を上げる。CLとの距離はあくばかりで、遅れてはならないと必死で追う。周りを眺める余裕はない。汗だくになった顔にかかるブッシュが疎ましい。手で払い退けながら思う事は、《ああ一懲りもせず、又ハードな山に来てしまった》という後悔ではないが、重い思いであった。

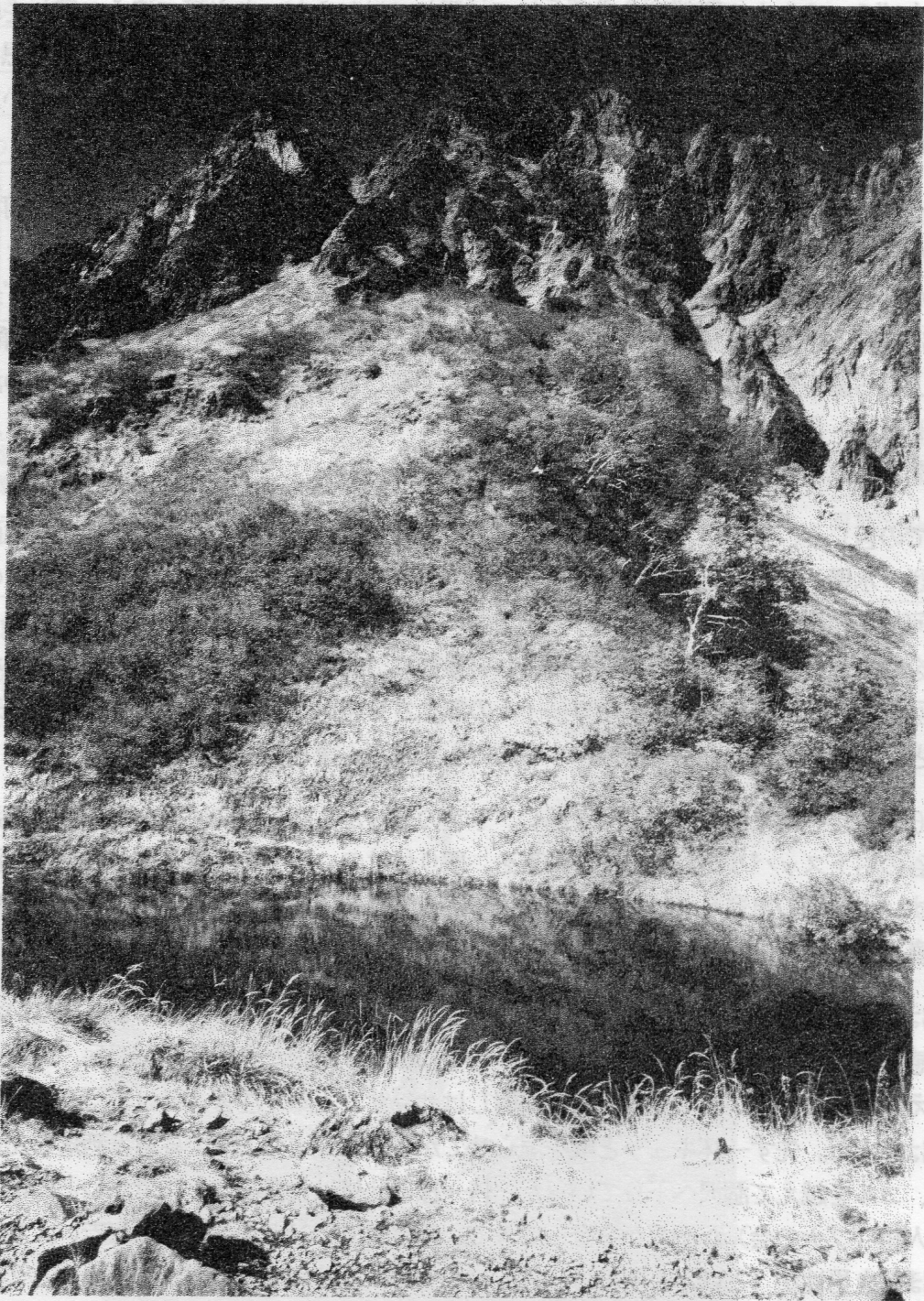
『オーイ。凄いゾ!』その声にちかずくと、いきなり視界が開けた。凄い! 凄い! 前穂高の山頂から鋭い峰が屏風のように広がり、垂直に切り立った壁の下には今が真っ盛りと目にも鮮やかな紅葉が赤い絨毯のように埋めつくされていた。休む間なく草付きのジグザグ道から左手に伸びる小尾根を登るとポンと奥又白池に出る。標高2470mのこの地点は前穂高に突き上げる壁を登るクライマー達の中継点として親しまれ、CLも若かりし頃芦安の清水と前穂右岩稜、Dフェース等登る為にテン泊地にしたそうで『素晴らしく綺麗な池だよ』と何回も聞かされたものだ。

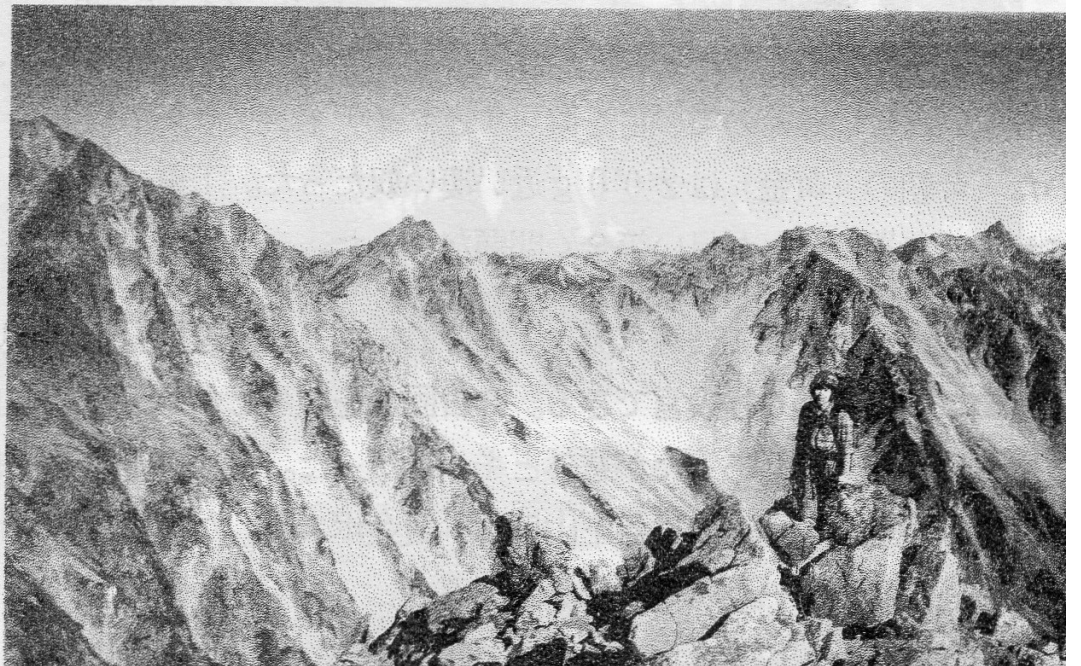
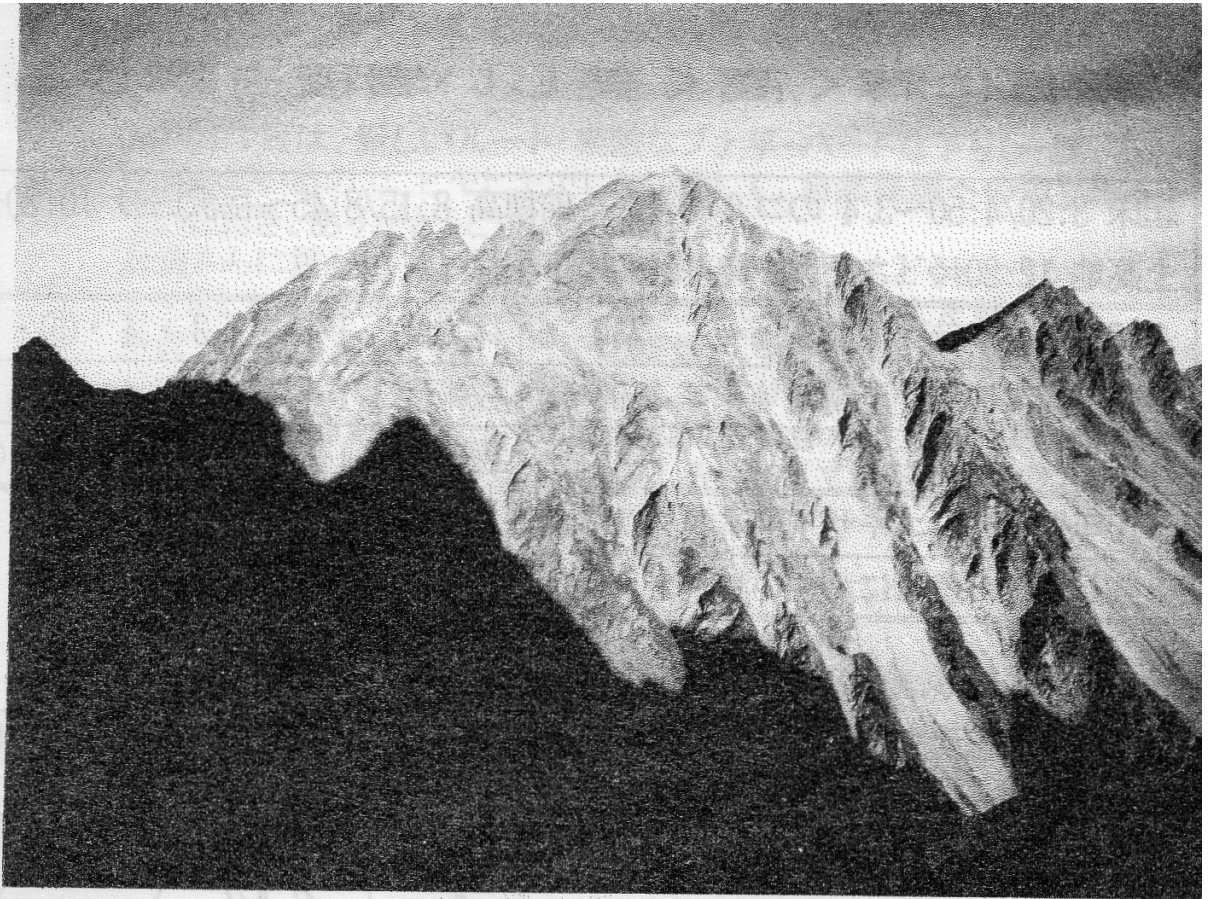
今までの苦しみ、辛さがスッと消えた。そして感動がジワジワ押し寄せる。静かな池面には、小説「氷壁」の舞台となった前穂東壁や、宝の木と呼ばれるダケカンバの紅葉がその儘映り、何故か私は「モナリザの微笑み」を池面に重ねてしまう。先客が4名。一心にファインダーを覗き込んでいた。話以上の素晴らしい景観に、此处でテン泊したい衝動にかられた。が、今回肩を外して来られなかったコーイチの無念さを思い、来年コーイチを連れて又来ればいいとCLと話しながらやっとなりにする。でもすっごく後ろ髪引かれました。

5・6の科尔へは来た道を一旦引き返し、T字の分岐から涸沢方向に微かな踏み後を辿る。奥又白谷の右下スッパリ切れ落ちた岩礫帯を、取り付けのロープを手繰りながら慎重に渡り、崩れやすいガラ場の急登を滑り落ちないように四つん這いでトラバース。更にイヤらしい草付きを直登し、最後に崩壊した斜面をひと登りで5・6の科尔だ。

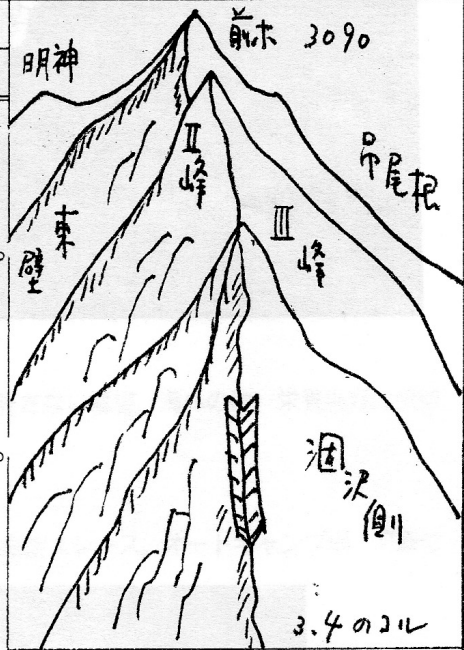
科尔は狭く、2張りがやっとなり。でもテントを背負って此处まで来る人はあまり居ないだろうなと感じる。4峰が眼前に荒々しく迫る。右手には吊り尾根から奥穂、涸沢岳、北穂が悠々と聳え涸沢のカールがとても美しい。陽射しはサンサンと降り注ぎ、日はまだ高い。テント設営はあとだ。先ず一杯キュッと喉を湿らせてから、お天道様の下で昼寝と洒落こんだ。8人程、科尔を越えて涸沢へ下りていった。皆一様に此处は大変なコースですねと口にする男女3人組(ブナの会)が涸沢から登ってきて、直ぐ隣でテントを張る。未だ若い。リーダーとおぼしき男性が『とにかく明日は、なるべくザイルは使わずガンガン登るよ』と2人に拍車をかけていたのが印象に深い。肌寒くなった頃テントを張り、夕食をとる。しかし持ち上げた酒類は既に飲み干し、アルコール後藤としては口寂しいらしく隣のテントの酒の量を大分気にしていた。
(注・1)

日は落ちて星が煌々と瞬く。いよいよ明日は念願の北尾根登攀だ。槍から穂高縦走の折りに見掛けた北尾根に撞れ、何時か登ってみたいと心にあった北尾根が今、目の前にある。





| | | | |
|--|---|---------------------|-------------|
| 山名 | 前穂高岳 (3090 m) ・北尾根 | 報告者 | 後藤 隆徳 |
| この山のセールスポイント | 朝日に輝く高く美しい岩稜を攀じる | | |
| 10月7日(日)コース及びタイム | 起床 3:20/4:50~3.4 のコル 6:15 ~前穂高 8:15/8:45~岳沢ヒュッテ 10:20~上高地 12:20⇒「さとう」発 14:00⇒下土狩 19:15 | | |
| 標高差 | △ 5.6のコル m 前穂高 m = 340 m | 体力度 | 1・2・3・4・⑤・6 |
| | ▼ 前穂高 m 上高地 m = 1590 m | 技術度 | 1・2・3・4・⑤・6 |
| | | 展望度 | 1・2・3・4・5・⑥ |
| CL | 後藤隆徳 54 | 10年振だったがエキサイティングだった | |
| | 加藤秀子 52 | 久し振りの登攀にだ〜い満足! | |
| 三日目 | <p>不気味な程静かな北尾根5. 6のコル。無風快晴の夜は怪しげな月だけが生き活きとしていた。時折、遠くで乾いた落石の音が「カラカラカラ」と圏谷に響く。その音が如何にも高山を感じさせた。軽量化のシュラフ・インナーとカバー2枚(全部で1kg)では寒く、加トーに更にインナーを借りたがやっぱり背中が冷えた。結局3時を回った所で思い切って起きてしまった。隣の「ぶなの会」は未だ寝ているようだ。簡単な朝食を済ませ出発。</p> | | |
| | <p>未だ真っ暗なのでランプの光りが右に左に揺れる。それでもやはり早い人はいるもので、目を凝らすとザイティングラードにも幾つかのランプが動いていた。今朝の「黄金」は200g近い凄腕奴だった。丁重に凝固シートに包みゴミと一緒にザックに忍ばせたが臭い等全く問題なかった。</p> | | |
| | <p>「ぶなの会」も起きたようだ。彼等(男1・女2)にも「黄金運搬」をお願いした。この北尾根5. 6のコルは3張り程設営できる。昨日回りを観察したが、「クソ」は見当たらなかった。奥又白池畔も少しあったが意外とキレイだった。皆で少し気を配れば、後から来た人がとても気持ち良い。今後は各下山口に「黄金ポスト」が設置されれば万全なのだが……。マッ、何れそういう時代になるであろう。</p> | | |
| <p>先ず5峰の登りにかかる。5峰はかなり大きい。しかし、技術的には全く問題ない。むしろ1~2級程度の易しい岩場が続き快適だ。5峰の頂き付近にもテン場が2~3あった。少し下ると4峰の登りだ。ようやく夜は明け常念の上空がバラ色に染まった。ランプをしまふ。4峰は5峰より難しいがルートの間違えなければ問題はない。下半部は直上し、登るに従い左に巻いて行く。10年前の5峰、此頃は寒かった。傾斜がない所に雪がベッタリついて難しかった。巻いて右上を目指したが、ハンクシールロープにマター 更に左</p> | | | |



を巻いて4峰に出た。

ここからモルゲンルート（朝焼け）に染まる3峰は「高く、厳しく、美しい」かった。加トーが先行して写真を撮る。下から空荷の若い衆が追いついてきた。今朝涸沢から登ってきたという2人は、ザイルも持たずズックだった。聞けば防衛大の学生で冬の偵察という。3峰をノーザイルで登って行ってしまった。力が有るとはいえ落ちれば即死である。未だ怖い物知らずカナー。

私のトップで3峰にかかる。頭にあったイメージとは違い、明るく乾いた快適な岩だった。マァ10年前はモーレツな嵐だったのでムリもないことだが。実は此处を下った経験もある。20年前だ。上高地に到着して岳沢から前穂に登り、北尾根を3、4の科尔まで下り、B沢に入り右岩稜を登ったのだ。一緒に登ったDフェースの連中が遅くて頂上で1時間昼寝をして岳沢に下山した。頂上では寝不足もありバクスイで起きた一瞬家にいると思いきや笑ってしまった。若い頃は随分体力があったものだ。今回も前日徳沢に泊まり、3時頃からアタックすれば1日で充分往復出来たと後で気がつき「失敗した！」と思ったりしたが。どうかな・・・。

難しいとされる右のチムニーに入る。岩がハング気味なのでステナワを掴み強引に登る。3峰からそんな所が随所にあり、今回は家に帰っても2～3日腕がギシギシした。加トーを迎えながら涸沢を眺めると物凄いテントの数だ。小屋もウワサではタタミ1枚に5人とのこと。帰りに上高地に入りきれないバス、タクシーが駐車場から大正池まで続いているのを見て納得した。このシーズンは何でも夏より込むそうである。

加トーが何やら大騒ぎをしながら来る。余りの素晴らしい岩にいささか興奮気味だ。しかしテラスに着くと何とヌンチャク（カラビナとかカラビナをシュリングで連結したもの）が2セット少ない。正すと絶対落としたり忘れてはしていないという。だが、私は何時も5セット持参しているので間違いはない。とにかく上から確保し捜しに行かせると、直ぐ下に2セット落ちていた。ハシャギ過ぎだろうか？他に「クローブ・ヒッチ」（マスト結び）が分からず怒られ、結局、向こう1年間私の「ドレイ」になることで一件落着。

更に快適に登ると3峰の頭に出た。無風快晴で暖かい。こんな日は1年でもそうないだろう。槍が、穂高が、常念が大きい。ぶなの会がやっと4峰に見えた。ザイルを結んでいる所を見ると4峰で使ったみたい。あれでは時間がかかる。前穂頂上の登山者に手を振ると応えてくれた。2峰は手の切れるようなナイフリッジに行く。特に涸沢側は見事に切れている。正に岩登りの醍醐味だった。この辺はちょっとヨーロッパ・アルプス的だ。

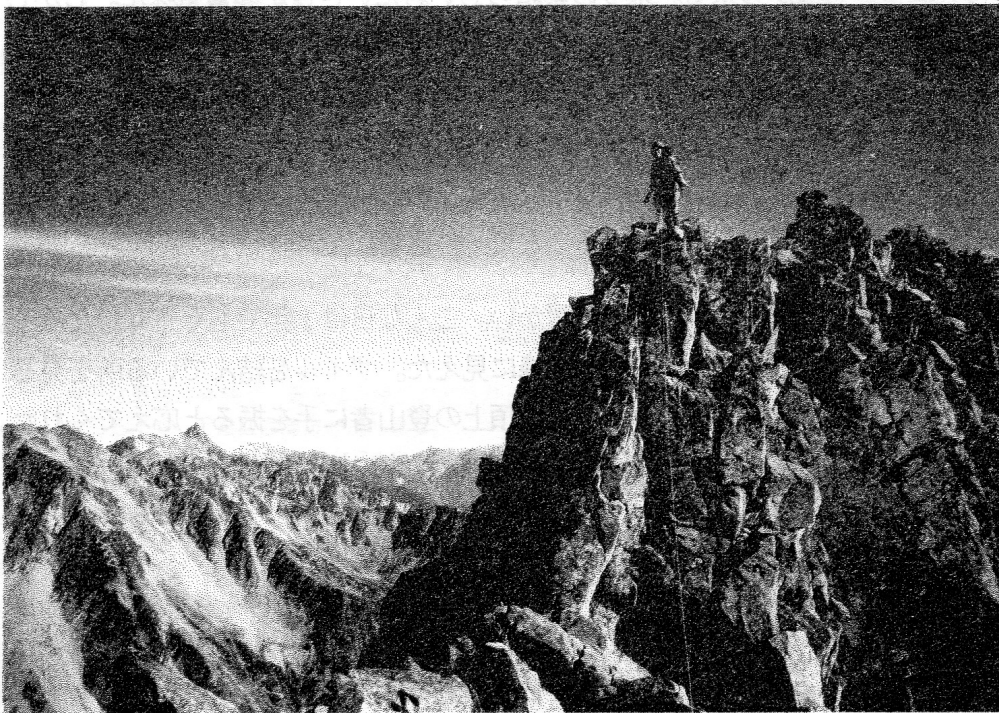
ゆっくり味わうように頂上着。皆が『ご苦労さん』と拍手で迎えてくれた。いつも思うが皆の優しさが嬉しい。まだ8時15分だ。家、コーイチ、ショージにTELして驚かす。『エーッ、本当ですか？』とのこと。エッヘッヘッ。皆を驚かすのはユカイだ。大休止して下山。「ドレイ」は今日のチョンボを痛く恥じて、黄金、ゴミ、ザイルを持っていくと申し出る。

「好意」は有難く受け取ることにして私はルンルンと下山した。途中25名の団体が登ってきた。皆でブーイング。途中で切れチューの。又、カラン、カラン、コロン、チリン、チリン、鈴だかカラベルだか付けた連中がうるさくて参った。ワリヤー（失礼！伊豆弁）牛か！

岳沢ヒュッテのカンパの紅葉は見事だった。ベンチに座りラーメンを食いながらビアを2本頂いた。加トーは今年は、北鎌尾根と北尾根をかせいだ。私もこれで暫くは肩の荷が下りた。新品の靴の右足にマメが出来たようだ。

その他のこと。

1. 春に堀さんと3人でやろうと誓ったのだが、堀さんは体調不良で不参加になった。残念だった。
2. 夏に北鎌に続き長岡君も参加予定だったが、怪我で不参加になった。また行こう。
3. 上高地がのタフシ-は貸切とメ-タがある。混雑時は貸切、空いている時はメ-タが安い。貸切の場合各社違うので、必ず乗車前に交渉のこと。
4. 前穂頂上の携帯は数センチのピンポイント。



穂高の二つの尾根に寄せて・

かとう ひでこ

あれは何時だったか……。隣に小田チャンがいた。前穂に突き上げる
ホクホク尾根を見て『あの尾根に登ってみたい』と私が言うと、『俺も気
になっているんだ。登ろうな』と小田チャン。会長が確か一緒に『何時か
登れるさ』と言ったような記憶がある。何時だったんだろう。


あれは何時だったか……。確か入会して初めての泊りの忘年会に参加
した時だったと思う。会長が三島労働山の冬山山行での、北鎌尾根のハミリを
映写してくれた。荘厳な雪山に果敢に挑戦し、又無邪気な子供のように雪
と戯れ遊ぶ姿に、雪山の魅力を果てし無く夢にみた。

あれから何年経ったのか？……。チャンスはいまほり巡って来た。そ
れも北鎌尾根と前穂北尾根両方である。今年の8月、北鎌尾根を縦走。テ
ントを背負い、貧乏沢で一泊。翌北鎌尾根から槍平小屋まで一気に抜けた。
そして同年10月。新井村橋から中富新道経由5・6のコルでテン泊。翌、
北尾根から前穂、岳沢経由の上高地から帰省。

北鎌尾根はハミリで見た雪山とは全く趣が違いますが、やはり容易に行ける
所ではなかった。体力・技術・ルートファイティング・決断力等総合力を
必要としてそれが欠けても難しい尾根である。バテバテで、体力に少し自信
があった私としては、精神的にクシャンコになった。

北尾根では、回収したシュリンクを落とすという初歩的なミスをして、
『人を教えるには、未だ10年早い！』とC.L.の叱責をかった。『俺の教
え方が悪かったのかあ～』と嘆く姿に何も言えぬ、ただ頭を垂れる。

でもやってなんぼ。してみない事にはおからない貴重な体験の数々。失
敗も私にとっては肥やしだ。(命が掛かる山行にそんな事言うと、又『だ
からお前は進歩がないんだ』と怒鳴られそう。)でも物事万事前向きに捉
えて、めいおに奮起するんだ。コーイチも手のハンテを背負いながら、今
まで自分には縁がないと諦めていた岩にトライし始めた。意欲的な工夫と
努力を怠らない姿勢には教えられる事が多い。歯に衣させないイイ指導者
と、イイ仲間にお恵まれた御蔭で念願の山を踏む事ができた。

冒頭の小田チャンも仕事の関係で、ハードな山行から段々と遠ざかって
しまったが、夢は何時か叶えて欲しい。心からそう思う。二つの尾根は、
いろんな面で私に新たな指標を与えてくれた。山にLove !